



日本語・イタリア語の借用語における相手言語からの母音長受け入れと音韻構造

田中, 真一

(Citation)

神戸言語学論叢, 10:37-50

(Issue Date)

2016-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009332>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009332>



日本語・イタリア語の借用語における相手言語からの 母音長受け入れと音韻構造

田中 真一

神戸大学

1. はじめに

本稿は、音韻的に比較的共通点の多いと言われるイタリア語と日本語の、とくに相手言語からの借用語における母音長受け入れの分析を通して方策の異同を明らかにし、その意味を考察する。両言語において相手言語の母音長受け入れには、音節構造およびアクセント・強勢構造といった韻律構造が相互に、そして密接に関与することを新たに提示する。

おもな主張点は次の三点である。一つは、日本語がイタリア語の母音長を受け入れる際、借用元 (L2) のイタリア語の強勢位置によって、受け入れ方に明確な非対称の見られることを報告する。もう一つは、それと同時に、日本語側 (L1) のアクセント構造も関与し、とくに平板アクセントを実現させるために、イタリア語の長母音受け入れが阻止される場合のあることを示す。三点目として、イタリア語が日本語の母音長を受け入れる際、イタリア語 (L1) の音韻構造と同時に、日本語 (L2) の音節構造とアクセント構造も参照しながら操作を行い、それがちょうど日本語がイタリア語を受け入れる際の操作と鏡像関係にあることを指摘する。

1.1. イタリア語の母音長と音韻構造

日本語とイタリア語は、ともに開音節性の高いこと、母音体系に近い構造を持つこと、子音長の対立がある等の面で、音韻的特徴に類似点が多いとされている。

しかしながら、異なる点も存在し、とくに母音長対立の面では両言語は対照的な振る舞いを見せ、その関係するリズム構造についても、イタリア語が音節拍リズムを有するのに対し、日本語がモーラ拍リズムを有する点において相違点を見せる (Dauer 1983, Vance 2008)。さらには、リズム構造がアクセント・強勢付与に対して、大きな違いをもたらすものとして関与することが知られている (Marotta 1985, Borrelli 2002, 田中 2008)。ここでは、これらの相互作用について確認しながら、次節以降の分析に直接関わる両言語の音声・音韻構造を示し、問題の所在を指摘する。

日本語がモーラの等時性により母音長の音韻的対立を保持するのに対し (Tsujiura 2007, Vance 2008)、イタリア語はそれらの音韻対立を持たず、音節構造と強勢構造によって母音長が大きく変化する (Marotta 1985, Canepari 1992, Borrelli 2002, Krämer 2009)。たとえば、強勢音節内の母音は、非強勢音節内のそれよりも、はるかに長い。また、(1) のように開音節内

の母音は閉音節内のそれよりも長く、このため前者は一貫して長母音記号で表示される
(なお、. および母音上のアクセント記号は、それぞれ音節境界とその母音への強勢を表す)。

- (1) a. 開音節: ró:ma (Roma : ローマ), ná:po.li (Napoli : ナポリ)
ro.má:..no (romano : ローマの), na.po.le.tá:..no (napoletano : ナポリの)
- b. 閉音節: té:m.po [*té:m.po] (tempo : 時間), pá:r.ko [*pá:r.ko] (parco : 公園)
stél.la [*sté:l.la] (stella : 星), fét.ta [*fé:t.ta] (fetta : 一切れ)

1.2. 日本語借用語とイタリア語のデフォルト強勢

アクセント・強勢の面では、日本語とイタリア語はともに語末から数えるという点、また、語形成時に後部要素が全体のアクセント・強勢を支配する点において共通している。しかしながら、アクセント標示が日本語ではピッチ (高さ) であるのに対し、イタリア語ではそれが強勢であるという点で異なっている。後述のように、これらの面での異同がお互いの言語の母音長受け入れに関係する。

とくに、重要な点として、日本語の借用語アクセントはイタリア語のデフォルト強勢位置との間に少なからぬ共通点が見られ、音節に基づく (2) のような規則が存在する (Kubozono 1996)。具体例を (3) に挙げる (なお、' はアクセント核を表す)。

- (2) 次語末音節にアクセントを置く。ただし、そこが軽音節の場合、もう一つ前 (語末から3つ目の音節) にアクセントを置く。
- (3) a. トレ'ード、カレン'ダー、ヨーロ'ッパ、チョコレ'ート、アルバ'イト、パ'ンダ
b. ド'ラゴン、エネ'ルギー、ブラ'イダル、ア'マゾン、シン'フォニー、ク'ラス

これに対し、イタリア語は、次語末 (語末から2音節目) に強勢の置かれる型がデフォルトである (Borrelli 2002, Krämer 2009, etc.)。¹

イタリア語においては、次語末がもともと重音節の場合、具体的には尾子音を伴う閉音節である場合は、自動的にその位置に強勢が付与されるのに対し、そこが開音節の場合は、先述の通り、その母音が長母音になることで重音節を形成する。また、語末3音節目の開音節に強勢の置かれる場合も同様に母音が伸張り重音節となる。つまり、結果として、語末以外に位置する強勢音節は必ず重いということになる。これは「より重い音節に語の卓立要素 (アクセント・強勢) を置く」という、Peak Prominence (Prince and Smolensky 1993/2004) と呼ばれる一般的な制約と関係する。両言語のアクセント・強勢位置に関する異同をまとめると、日本語借用語アクセント規則のうち (3a) と、イタリア語のデフォルト強勢との間に部分的

な共通性が見られるわけである。²

1.3. 問題の所在

以上を前提として、両言語の相手言語からの母音長受け入れに着目すると、まず、イタリア語から日本語に借用される場合、(4) のように、イタリア語の長母音 (非語末の強勢開音節内の母音) が、日本語において長母音として受け入れられるのに対し、それ以外の母音は短母音として受け入れられるという予測が立つ。³

(4) ve.ró:.na	(Verona)	→	ヴェロ'ーナ
a.mó:.re	(amore)	→	アモ'ーレ
kan.tá:.re	(cantare)	→	カンタ'ーレ
pe.pe.ron.tfí:.no	(peperoncino)	→	ペペロンチ'ーナ

しかしながら、(5a) のように、イタリア語の長母音が日本語に、むしろ短母音として受け入れられる場合が少なからず見受けられる。さらには、(5b) のように、短母音として受け入れられるのと同時に、アクセントが消失する例も散見される (なお、⁰ は、平板アクセント (無核) を表す)。

(5) a.	ná:.po.li	(Napoli)	→	ナ'ポリ	(*ナ'ーポリ)
	pá:.do.va	(Padova)	→	パ'ドヴァ	(*パ'ードヴァ)
	fí:.ga.ro	(Figaro)	→	フィ'ガロ	(*フィ'ーガロ)
b.	i.tá:.lja	(Italia)	→	イタリア ⁰	(*イタ'ーリア、*イタ'ーリャ)
	so.prá:.no	(soprano)	→	ソプラノ ⁰	(*ソプラ'ーナ)
	o.ka.rí:.na	(ocarina)	→	オカリナ ⁰	(*オカリ'ーナ)

反対に、日本語からイタリア語に借用される場合、イタリア語の無標の強勢位置 (次語末音節) にそれが置かれる (6) のようなパターンと、それが語末に置かれる (7) のようなパターンが混在するようである。とくに、(6b) と (7b) は、日本語ではともにアクセントを持たない平板アクセントの語であるにもかかわらず、イタリア語では異なる強勢位置を持つものとして受け入れられる。

(6) a.	カタカ'ナ	(片仮名)	→	ka.ta.ká:.na	(katakana)
	すも'うとり	(相撲取り)	→	su.mo.tó:.ri	(sumotori)
b.	カラオケ ⁰	(カラオケ)	→	ka.ra.ó:.ke	(karaoke)
	パチンコ ⁰	(パチンコ)	→	pa.tfín.ko	(pachinko)

- | | | | | | |
|--------|-------------------------|---|----------|-----------|----------|
| (7) a. | きょーげ'ん (狂言) | → | kjo.gén | *kjó:.gen | (kyogen) |
| | ばんざ'い (万歳) | → | ban.dzái | *bán.dzai | (banzai) |
| b. | ぜんしゅー ⁰ (禅宗) | → | dzen.shú | *dzén.shu | (zenshu) |
| | みりん ⁰ (みりん) | → | mi.rín | *mí:.rin | (mirin) |

上記のような事実について報告された研究は、管見の限りほとんどなく、さらには、なぜそのような分布を示すのかについて、従来の研究では論じられていないといつてよい。

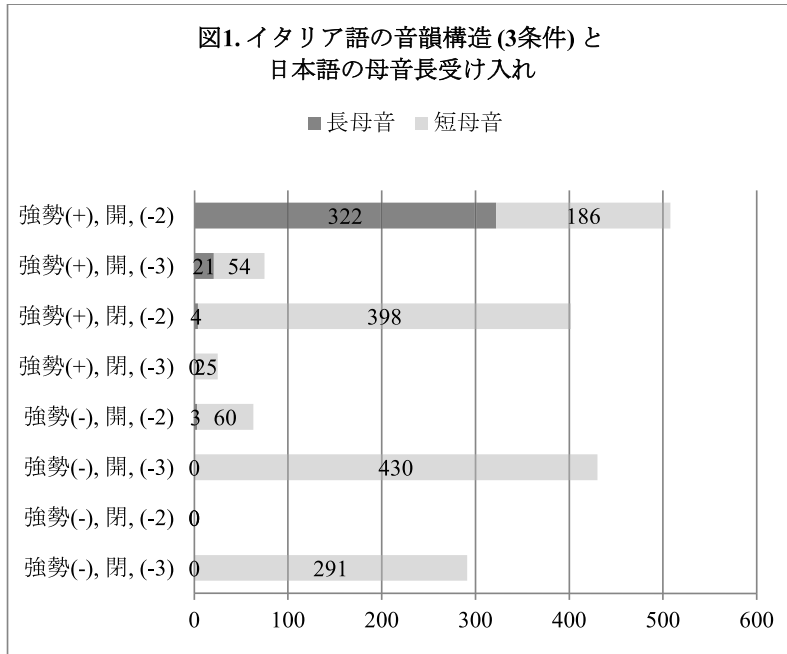
借用語を扱った研究は、イタリア語においても (Klajn 1972, Repetti 1993)、また、日本語においても (Lovins 1975, 川越 1995)、英語由来のものが大半を占め、それ以外の言語からの借用例についての研究は非常に少ないのが現状である。ましてや、日伊両言語相互の受け入れの関係について扱ったものや、その一般言語学的な意味について論じた研究は皆無に近いと言ってよい。

本稿では、このような背景を踏まえ、(4)–(7)に見られる非対称性の生じるメカニズムを、両言語のアクセント・強勢規則および音節構造といった韻律構造に求め、(5a) が日本語の借用語アクセント規則によって重音節、つまり、長母音を要求しないこと、また、(5b) が、入力のイタリア語の音節構造をもとに短母音として受け入れられることで、日本語のもっとも生産的な平板アクセントの生起を可能にするためであることを指摘する。さらに、(6) と (7) の非対称については、イタリア語が日本語のピッチアクセントの情報を自言語の強勢と「見立てる」ことにより位置を参照するとともに、そこにイタリア語側 (L1) の音韻構造を反映させた結果であることを新たに提示する。これらの事実をもとに、借用語音韻論における L1 と L2 の関係を示し、その言語学的意味を考察する。

2. イタリア語由来の日本語借用語における母音長の受け入れ

『広辞苑』(第5版)、『コンサイス・カタカナ語辞典』(第2版)、『大辞林』(第2版)より、イタリア語由来の借用語 981 例を抽出し、このうち、イタリア語における語末第2、第3音節の(つまり、強勢アクセントの期待される位置にある)母音 1,794 例を分析対象とした。

それらを、前節で確認した長母音に関係する3条件の組み合わせ、すなわち、イタリア語における強勢アクセントの有無、開音節/閉音節の別、音節の位置(語末2音節目/語末3音節目)により、8つのグループに分類し、それらと日本語側の長母音受け入れ数・率との関係を分析した。その結果が図1である。前提として、イタリア語 (L2) においては、図中の上2行がすべて長母音の生起する例であり、残りの6行はすべて短母音の生起する例である。



まず確認できる点として、日本語に長母音として受け入れられた母音 350 例のうち、大半 (92%: 322/350) が、イタリア語において強勢を伴う次語末 (-2) の開音節であることがあげられる。別の見方をすれば、イタリア語の短母音 (非強勢音節あるいは閉音節内の母音) が長母音として受け入れられる例は、ほぼ皆無ということになる。これらのことは、原語のイタリア語において長母音 (が生起する条件) でなければ、日本語化の際、長母音として受け入れられないことを端的に示している。しかしながら、同時に重要な点として、イタリア語の長母音すべてが日本語の長母音として受け入れられるわけではないことも確認できる。以下では、それらの受け入れられる条件について、それぞれイタリア語 (L2) と日本語 (L1) の音声・音韻構造の観点から分析する。

3. 分析

3.1. 長母音受け入れにおける位置の非対称性

開音節と強勢という 2 条件が揃えば、イタリア語の長母音が日本語の長母音として受け入れられるかといえば、そうではない。そこにはもう一つの条件である、位置の非対称が確認できる。

イタリア語におけるデフォルト強勢位置である次語末が強勢開音節の場合、(8) のように日本語の長母音の受け入れは大半 (63%: 322/508) に上るのに対し、位置の条件のみ異なる語末から 3 つ目の強勢開音節の場合、(9) のように長母音の受け入れ率は極端に低く (28%:

21/75)、反対に、短母音として受け入れられる割合 (72%: 54/75) の方がはるかに生産的となる。⁴

(8)	ró:.ma	(Roma)	→	ロ'ーマ	(*ロ'マ)
	ve.ró:.na	(Verona)	→	ヴェロ'ーナ	(*ヴェロ'ナ、*ヴェ'ロナ)
	por.tʃi:.ni	(porcini)	→	ポルチ'ーニ	(*ポルチ'ニ、*ポル'チニ)
	mi.la.né:ze	(milanese)	→	ミラネ'ーゼ	(*ミラネ'ゼ、*ミラ'ネゼ)
	ros.sí:.ni	(Rossini)	→	ロッシ'ーニ	(*ロッシ'ニ、*ロ'ッシニ)
	lam.bor.gí:.ni	(Lamborghini)	→	ランボルギ'ーニ	(*ランボルギ'ニ、*ランボル'ギニ)
(9)	ná:.po.li	(Napoli)	→	ナ'ポリ	(*ナ'ーポリ)
	pá:.do.va	(Padova)	→	パ'ドヴァ	(*パ'ードヴァ)
	fi:.ga.ro	(Figaro)	→	フィ'ガロ	(*フィ'ーガロ)
	mé:.di.ʃti	(Medici)	→	メ'ディチ	(*メ'ーディチ)
	ba.zí:.li.ko	(basilico)	→	バジ'リコ	(*バジ'ーリコ)
	bal.sá:.mi.ko	(balsamico)	→	バルサ'ミコ	(*バルサ'ーミコ)

イタリア語において常に長母音として実現する母音に対し、日本語化された借用語では、とくに (9) において長母音が受け入れられず、(8) との間に非対称が生じることになる。

このような非対称の生じる要因は「借用語アクセント規則」との関わりから説明することが可能である。

(2) において、日本語の借用語アクセントには規則があり、「次語末音節にアクセントを置く。ただし、そこが軽音節の場合、もう一つ前 (語末から 3 つ目の音節) にアクセントを置く」ということを確認した。ここで音節量と母音長との関係に着目すると、長母音を含む音節は自動的に重音節となるのに対し、短母音の開音節は自動的に軽音節となる。この点において、アクセントと音節量が母音長と関係するわけである。

(8) は、日本語の借用語レベルにおいて、次語末にアクセントが置かれるため、その位置は重音節でなければならない。これを母音長の観点から見れば、長母音として生起させなければならないことになる。それに対し、(9) は日本語化の際、語末 3 音節目にアクセントが置かれるため、そこに必ずしも重音節 (長母音) を要求するものではない。このような日本語側 (L1) の音韻構造による要請が、イタリア語長母音の受け入れに関与するというわけである。また、イタリア語の強勢は日本語のピッチアクセントとして変換されている。

本節をまとめると、イタリア語の長母音 (の生じる環境) のみが、日本語の長母音受け入れの対象となるという意味において L2 (イタリア語) が、また、長母音受け入れの有無に、自言語の借用語アクセント規則が関与するという意味において L1 (日本語) が、それぞれ関与するということになる。

次節では、とくにイタリア語においてデフォルト（次語末）強勢開音節における、日本語側の長母音受け入れの阻止、すなわち、(8) と (9) 以外のもう一つの型の生起条件について分析する。

3.2. 平板アクセントの生起

日本語のアクセントに特徴的な型として、平板アクセント（無アクセント）の生起が挙げられる。その生起条件として音韻構造と意味構造が関係することが知られているが、両者は従来、無関係のものとして論じられてきた。このうち、借用語平板化の音韻構造については、(10) のような指摘がある。(11) は借用語において (10a-c) の条件をすべて満たした例を、(11a) は、このうちとくにイタリア語からの借用語を表す。

(10) 借用語平板アクセントの生起条件 (Kubozono 1996, 田中・窪菌 1999)

- a. 4 モーラの長さを持つ。
- b. 語末 2 つの音節が軽音節の連続である。
- c. 語末が非挿入母音である。

- (11) a. イタリア⁰、ヴェネツィア⁰、シチリア⁰、ブルガリ⁰、ソプラノ⁰
- b. カステラ⁰、ステレオ⁰、アメリカ⁰、パノラマ⁰、ホノルル⁰

借用語全体では平板アクセントを持つ語の占有率は 10%前後であるが、4 モーラ語 (10a) では 20%に上昇し、(10a-c) の条件をすべて満たした場合は、80%を超える (田中 1996)。これは、(10a-c) が、日本語、とくに和語の基本的な音韻構造と一致するためと考えられている (Kubozono 2006)。

本稿の分析と関係する点として、イタリア語は開音節性の高い言語であり、(10c) の条件について英語よりはるかに満たしやすいということが挙げられる。問題は、(10a) および (10b) との関わりである。じっさい、(11a) そして (5b) の語例においては、イタリア語の強勢と長母音とがともに実現されていない。以下ではそのような例について分析する。

ところで、上記以外にも平板アクセントの生起について、とくに意味、使用頻度の面からいくつかの指摘がされている。

- (12) a. なじみ度の高い語 (秋永 1985) : カルタ⁰、ボール⁰、テーブル⁰
- b. 専門家等の集団内で使われる語 (井上 1998) : ジャーナル⁰、ドラム⁰
- c. 語末に -ia を含む地名 (儀利古 2010) : ニカラグア⁰、カリフォルニア⁰

これら、とくに (12a, b) は、語の使用頻度と関連づけられる。田中 (2013) は、(10) の音韻・形態構造に関わる要因、とくに (10a) について、使用頻度に関する要因と結びつけることを

試みている。具体的には、語彙全般における各単語長（単語モーラ数）の占有率の順位と、各単語長における平板率の順位とがほぼ完全に一致することから、とくに (10a) と (12) とをまとめ「意味的に、あるいは音韻・形態的に使用頻度の高い語は平板アクセントとして生起しやすい」という一般化を提案している。⁵

(10a-c) の音韻制約は、日本語においてイタリア語長母音の短母音としての受け入れと大きく関わる。とくに問題となるのが、(10b) の音節構造の実現と、長母音の受け入れとの関係、すなわち、語末 2 音節を短母音化して軽音節の連続 (-LL#) とするか、あるいは、次語末の長母音を保持し「重軽」の連続 (-HL#) とするかという選択である。

先述の通り、イタリア語長母音の短母音としての受け入れは、日本語におけるモーラ数とアクセント型とがともに関係する。イタリア語の長母音が日本語に短母音として受け入れられるのは、そうすることで日本語化の際の長さが 4 モーラになること、同時に、語末 2 音節が軽音節の連続 (-LL#) になること、さらには（語末母音は基本的に非挿入母音であるので）それらの結果として、平板アクセントを伴う構造になる場合に多いことになる。

イタリア語本来の長母音を短母音化して受け入れることで、より安定した形で日本語語彙に定着されるためと言える（詳細な数値化については今後の課題とする）。⁶

(13) kre.mó:.na	(Cremona)	→ クレモナ ⁰	so.na.tí:.ne	(sonatine)	→ ソナチネ ⁰
mar.sá:.la	(marsala)	→ マルサラ ⁰	kam.pá:.ri	(Campari)	→ カンパリ ⁰
bul.gá:.ri	(Bulgari)	→ ブルガリ ⁰	sa.ljé:.ri	(Salieli)	→ サリエリ ⁰
o.ka.rí:.na	(ocarina)	→ オカリナ ⁰	mak.ke.ró:ni	(maccheroni)	→ マカロニ ⁰
ra.vjó:.li	(ravioli)	→ ラビオリ ⁰	fer.ra.gá:.mo	(Ferragamo)	→ フェラガモ ⁰

このように見ると、(13) の操作は、入力 of イタリア語 (L2) の韻律構造を参照しながら、日本語 (L1) のレベルで短母音化して受け入れることで、日本語のもっとも生産的な型である平板アクセントを誘発させるためのものと解釈できる。⁷

4. イタリア語における日本語からの借用語と母音長の受け入れ

ここでは、日本語からイタリア語に入った借用語の母音長と強勢、および L1 と L2 との関わりを見る。以下の語例は、すべて、De Mauro and Mancini (2003) のコーパス、*Le Palore Straniere* による。日本語の例における 上線 と 下線 は、それぞれ高ピッチと低ピッチを表す。

(14a) は日本語のピッチアクセントと同じ位置に強勢が置かれるもの、(14b) は日本語と異なる位置に置かれ、したがって、長母音の位置の異なるもの、(14c, d) は日本語で平板アクセントであるものであり、このうち (14c) はイタリア語化の際、強勢母音が長母音化され重音節になるもの、(14d) はもともと尾子音を伴う次語末重音節に強勢が置かれた例である。

- (14) a. わ' か (和歌) → wá:.ka (waka)
 カ.タ.カ'ナ (片仮名) → ka.ta.ká:.na (katakana)
 b. す.も' 一.と.り (相撲取り) → su.mo.tó:.ri (sumotori)
 ば' く.ふ (幕府) → ba.kú:.fu (bakufu)
 c. カ.ラ.オ.ケ⁰ (カラオケ) → ka.ra.ó:.ke (karaoke)
 け 一.れ.つ⁰ (系列) → kej.ré:.tsu (keiretsu)
 も.や.も.や⁰ (もやもや) → mo.ja.mó:.ja (moyamoya)
 d. パ.チン.コ⁰ (パチンコ) → pa.tʃín.ko (pachinko)
 ばん.ちゃ⁰ (番茶) → bán.tʃa (bancha)

いずれもイタリア語のデフォルト位置に強勢を置くという操作が行われている。これに対し、以下のように、次語末ではなく語末に強勢の置かれる例が観察される。

- (15) a. ぜん.しゅー⁰ (禅宗) → dzen.shú *dzén.shu (zenshu)
 てん.り.きょー⁰ (天理教) → ten.ri.kjó *ten.rí:.kjo (tenrikyo)
 b. み.りん⁰ (みりん) → mi.rín *mí:.rin (mirin)
 しゃ.み.せん⁰ (三味線) → ʃa.mi.sén *ʃa.mí:.sen (shamisen)
 c. きょ.う.げ'ん (狂言) → kjo.gén *kjó:.gen (kyogen)
 ばん.ざ'い (万歳) → ban.dzái *bán.dzai (banzai)
- (16) い' っ.ぽん (一本) → íp.pon *ip.pón (ippon)
 け' ん.どー (剣道) → kén.do *ken.dó (kendo)
 ぶ.し' どー (武士道) → buf.ʃí:.do *buf.ʃi.dó (bushido)

(14) から (16) における強勢位置の非対称については、日本語 (L2) の音節構造とアクセント構造との組み合わせによって、次のような一般化が可能である。

(17) イタリア語の日本語由来借用語の強勢規則

日本語の語末が重音節で、かつ、その音節に高ピッチが含まれる場合は、借用語は語末音節に強勢を置き、それ以外の場合はすべて、デフォルト位置 (次語末音節) に強勢を置く。

借用語において入力言語 (L2) である日本語の音節構造とアクセント構造とが、ともに直接、強勢付与に関与するということになる。イタリア語は、日本語の語末音節の重さとその位置のピッチ (高ピッチが含まれるか否か) をともに参照し、重音節と高ピッチという条件が重

なった場合にのみ、その位置に強勢が置かれるという一般化となる。このことは同時に、上記の条件のうちいずれかが対象外となった場合、イタリア語にとってのデフォルト位置（次語末音節）に強勢を置くということを意味する。日本語において同じ平板アクセントを持つ (14c, d) と (15a, b) との間において、語末の音節量によって強勢位置に非対称が生じる点、また、語末が等しく重音節であってもその位置に高ピッチが含まれない (14) の場合、(15) とは異なり語末ではなく、デフォルト位置（次語末）に強勢が置かれるという点からもそれは明らかである。また、これらのことは、イタリア語が L2 (日本語) における語末の音節量とピッチを等しく参照しながら受け入れていること、そして、イタリア語としての無標の表出 (TETU: The Emergence of Unmarked, McCarthy and Prince 1994) の要請を、同時に満たしていることを示している。興味深い点として、イタリア語は、入力言語である日本語の語末音節量について参照はするものの、出力形としてはすべて軽音節としてのみ実現させることが確認できる。

さらに重要な点として、L2 参照の際、イタリア語は日本語のピッチ（アクセント）を自言語の強勢として捉えていることが挙げられる。これらの事実は、日本語がイタリア語からの借用語を受け入れる方策と鏡像関係にあることを示している。

また、両言語において、L2 の母音長を L1 の無標のアクセント・強勢構造を実現させるため調整するという意味において、両言語の母音長受け入れには共通性が見られるわけである。以上のように、日本語とイタリア語の母音長と強勢・アクセントの受け入れには、L1 と L2 の両方の情報によって出力形が決定されることが確認できる。

5. 考察

本稿は、とくに日本語とイタリア語の相手言語からの母音長受け入れの分析を通して、入力 (L2) の音声構造と受け入れ側 (L1) の音韻構造との関わりを示した。

日本語におけるイタリア語からの母音長受け入れに関しては、入力 (L2) の音声構造が反映されており、イタリア語の長母音（強勢開音節内の母音）のみが日本語の長母音として受け入れられることを確認した。それと同時に、すべての長母音が日本語にそれとして受け入れられるわけではなく、日本語 (L1) の音韻構造も受け入れに「借用語アクセント規則」の適用、そして「平板アクセント生起条件」という意味で関与することを示した。

同じイタリア語の長母音も、その含まれる位置がデフォルト（次語末音節）か、一つ前の語末 3 音節目かで、長母音としての受け入れに非対称が見られ、前者が長母音として受け入れられるのに対し、後者は短母音として受け入れられることを、第 3 節で数量的に示した。

上記の非対称の生じる要因について確認すると、そこには、日本語側 (L1) の借用語アクセント規則が関与すると解釈できる。仮に長母音としてではなく短母音として受け入れられれば、(3) のアクセント規則と不整合が生じ、不適当な出力形が生起することになる。反

対に、語末 3 音節目に原語強勢、そして、受け入れ側のアクセントの置かれる場合、その位置の音節は、日本語において軽くても重くてもアクセントの実現に影響はまったく及ばさない。このため、より無標の構造である短母音としての受け入れが多数を占め、長母音の受け入れに対する位置の非対称性が生じるわけである。

また、イタリア語における日本語母音長とアクセントの受け入れに関しては、日本語 (L2) の語末音節量とそのピッチがともに重要な役割を担うこと、それと同時に、イタリア語側 (L1) の音韻構造が、デフォルト位置への強勢付与を行うという面で重要な役割を果たすことが確認された。このような、L2 の音声情報をもとに L1 の音韻構造を加味した形で最終的な出力形の得られることは、借用語音韻論の多くの先行研究で指摘されていることである (Hayes and Steriade 2004, Steriade 2007, Kang 2011)。

L2(入力) との関わりにおいて重要な点として、一つは日本語のピッチ (アクセント) を、イタリア語が強勢付与の手がかりとして知覚・利用している点である。具体的には、(語末重音節の) 高ピッチを強勢として受け入れている事実からそれは明らかであり、イタリア語が日本語 (L2) の音声を知覚し入力としていること、それと同時に、イタリア語 (L1) の音韻構造との照合によって最終的な出力形の得られることを端的に示している。

上記に関連した例として、英語由来の借用語における、東京方言のアクセント付与の方策が挙げられる。

東京方言の 3 モーラ借用語は、(18b-d) のように語末 3 モーラ目 (語頭) にアクセントの置かれる型がデフォルトであるが、(18a) のような音韻条件の組み合わせの場合に限り、次語末モーラ、つまり、語末音節へのアクセントが生起する (Kubozono 1996, 田中 2008)。

- (18) a. ドラ'イ、ブル'ー、ツイ'ン、ツリ'ー、トラ'イ、フロ'ー、プロ'ー、スキ'ン
- b. バ'レー、バ'ザー、ド'バイ、サ'タン、イ'ラン、プリ'ン、ブ'ザー、マ'リ
- c. ス'リル、ス'ミス、プ'ラダ、プ'ラザ、ド'リル、ド'ラム、ク'ラブ、ク'ラス
- d. ヴェ'ニス、イ'ラク、シャ'ネル、バ'ナナ、ト'マト、モ'ラル、マ'リア

(18a) と (18b-d) におけるアクセント付与の非対称は、原語である英語 (L2) の音声情報と借用側である日本語 (L1) の音韻構造とを同時に利用しなければ説明不可能である。

(18a) の生起は、「語頭が L2 (英語) にもともと存在しない挿入母音によって占められる」こと、そして「L1 (日本語) の語末が重音節である」ことという、2 つの条件が重なった場合に、はじめて生起する。(18b) は上記 2 条件のうち前者の条件から外れ、(18c) は後者の条件から、(18d) は両方の条件からそれぞれ外れている。つまり、(18b-d) は上記 2 条件のうち最低一つの条件から外れ、いずれも (18a) とは異なる、デフォルトのアクセント型が生じるわけである。

このように、入力 (L2) ・出力 (L1) の言語、また、音韻現象のレベルは異なるものの、L2 の情報を入力とし、そこに L1 の音韻構造をもとに操作を加えることにより出力形を得

るという意味で、(18) は本稿で扱った分析 (14)–(16) と平行的である。

6. 結びと課題

本稿では、日本語とイタリア語の相手言語からの母音長受け入れの分析を通して、L1 と L2 の音声・音韻構造の関わりを論じた。いずれの言語においても、入力として L2 (相手言語) の構造を参照し、そこに L1 (自言語) の音韻構造を反映させることで、最終的な出力形を導くことが明らかになった。これらのことは、借用語音韻論を扱ったうち、多くの先行研究と一致すると言える。

今後の課題としては、以下が挙げられる。第一点として、知覚情報との関わりである。イタリア語話者は、非語末の強勢開音節の母音を、ともに長母音として知覚・生成しているが (Canepari 1992)、それとともに、持続時間の面では次語末の強勢開音節内の母音と比べて語末 3 音節目の開音節母音の方が若干短いという報告がある (郡 1993, 池田他 1999)。日本語母語話者が (イタリア語母語話者の知覚しない) そのような持続時間の違いを聞き取っている可能性もあり、両者をどのように知覚するのかについての解明が必要とされる。

もう一つは、他の言語との関わりである。本稿では比較的音韻的類似点の多い、日本語とイタリア語について分析したが、任意の 2 言語における母音長、そして、アクセント・強勢の受け入れとの関わりが、今後の着眼点の一つである。分節音がリズムに、また、リズムがアクセントに関わる、逆方向も然りといったように、各音韻要素の相互作用によって出力形が決定されるということは、多くの研究で知られている (Prince and Smolensky 1993/2004, Kager 1999, 田中 2008)。それらの相互作用が、L1 を通しての L2 の受け入れにどのように関わるのかについての総合的な解明が、今後の課題である。

註

* 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B) (課題番号: 26284058)、同基盤研究 (C) (課題番号: 25370432)、および、日本学術振興会「頭脳循環プログラム」の助成を受けている。

1 語末から 2 音節目への強勢は、語全体の約 8 割を数え、計量的にも他の型を大きく上回る (Borrelli 2002, Krämer 2009)。

2 ただし、イタリア語は、語末強勢音節の母音は伸張しないという特徴を持つ (Marotta 1985)。

3 したがって、イタリア語から日本語に受け入れられる場合、いくつかの例外を除き、強勢位置は同じになることが多い。例外の一つは、母音挿入や上昇二重母音 (ia, ua) の処理の違いにより、音節の数え方にイタリア語との相違が見られる場合である。もう一つは、とくに (C)V.CV.CV という、開音節の 3 音節語において、日本語側で誤ったアクセント処理が行われたと思われる例である (mi.lá.no (Milano) → ミ'ラノ (*ミラ'ーノ), to.ri.no (Torino) → ト'リノ (*トリ'ーノ), ma.ri.a (Maria) → マ'リア (*マリ'ーア))。

4 もちろん、イタリア語において語末 3 つ目の強勢開音節内の長母音が、日本語化の際、そのまま長母音

として受け入れられる例もある。たとえば、*kan.tác.bi.le* (*cantabile*) が、*kan.táa.bi.re* のように受け入れられる例である。しかしながら、そのような例は短母音として受け入れられる例と比べ、数量的にはるかに少なく、また、しばしば、*kan.ta.bii.re* のように次語末の長母音・アクセントを伴う例も見られる。

5 (8b, c) について使用頻度と関連づけると、(8b) については、語末 2 音節における H と L の論理的組み合わせ、-HH#, -HL#, -LH#, -LL#のうち、もっとも生起頻度の高いのは最後の例、すなわち (8c) の -LL#である。また、(8c) については言うまでもなく、語末には挿入母音を含まない例が大半である。そのように見ると、使用頻度と音韻・形態構造との整合性が見いだせる。

6 ヴェネツィアおよびその近郊に、*mar.gé:ra* (*Marghera*), *més.tre* (*Mestre*), *zát.te.re* (*Zattere*)という地名があるが、現地に滞在する日本語母語話者は、それらをしばしば、マルゲラ⁰ (*ma.ru.ge.ra*⁰)、メストレ⁰ (*me.su.to.re*⁰)、ザッテレ⁰ (*zat.te.re*⁰) のように発音する。(8) の日本語の平板化条件に合致すると言える。とくに、はじめの例は、長母音を短母音として生起させることで、4 モーラと平板アクセントをともに実現している。

7 平板アクセントを伴う母音の短縮は、(長母音をカウントした場合) 5 モーラ語において、他のモーラ長においてよりも際立つという予測が立つ。この点についての計量的な分析については、今後の課題としたい。

参考文献

- 秋永一枝. 1985. 「共通語のアクセント」NHK (編) 『日本語発音アクセント辞典』 70–116. 東京：日本放送出版協会.
- 儀利古幹雄. 2010. 「日本語における語認識と平板型アクセント」 神戸大学人文学研究科博士論文.
- 郡史郎. 1993. 「イタリア語の韻律的特徴：音の長さを規定する要因について」『池田廉教授退官記念論文集』 185–210. 大阪外国語大学.
- 池田廉・西村暢夫・郡史郎・在里寛司・米山喜晟 (編). 1999. 『伊和中辞典』 (第2版) 東京：小学館.
- 井上史雄. 1998. 『日本語ウォッチング』 東京：岩波書店.
- 川越いつえ. 1995. 「借用語に見る促音化とリズム衝突」『言語研究』 108号, 46–78.
- 松村明. (編). 1995. 『大辞林』 (第2版) 東京：三省堂.
- 三省堂編修所. (編). 2000. 『コンサイス・カタカナ語辞典』 (第2版) 東京：三省堂.
- 新村出. (編). 1998. 『広辞苑』 (第5版) 東京：岩波書店.
- 田中真一. 1996. 「日本語の音節構造と音韻現象」 大阪外国語大学修士論文.
- 田中真一. 2008. 『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』 東京：くろしお出版.
- 田中真一. 2013. 「平板アクセントと言語構造」韓美卿 (編) 『音声・音韻』 (日本語学・日本語教育 2) 73–90. 韓国：J and C 出版.
- 田中真一・窪菌晴夫. 1999. 『日本語の発音教室—理論と練習』 東京：くろしお出版.
- Borrelli, Doris. 2002. *Raddoppiamento Sintattico in Italian: A Synchronic and Diachronic Cross-Dialectal Study*. New York: London: Routledge.

- Canepari, Luciano. 1992. *Manuale di Pronuncia Italiana*. Bologna: Zanichelli.
- Dauer, Rebecca M. 1983. Stress-timing and syllable-timing reanalyzed. *Journal of Phonetics* 11, 51–62.
- De Mauro, Tullio, and Marco Mancini. 2003. *Le Palore Straniere Nella Lingua Italiana*. Milano: Garzanti.
- Hayes, Bruce, and Donca Steriade. 2004. Introduction: The phonetic bases of phonological markedness. In Bruce Hayes, Robert Kirchner, and Donca Steriade (eds.) *Phonetically Based Phonology*, 1–33. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kager, René. 1999. *Optimality Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kang, Yoonjung. 2011. Loanword Phonology. In Marc van Oostendorp, Colin J. Ewen, Elizabeth Hume, and Keren Rice (eds.) *The Blackwell Companion to Phonology* IV, 2258–2282. Oxford and Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- Klajn, Ivan. 1972. *Influssi Inglesi Nella Lingua Italiana*. Firenze: Olschki.
- Krämer, Martin. 2009. *Phonology of Italian*. Oxford: Oxford University Press.
- Kubozono, Haruo. 1996. Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation. *The Bulletin (Phonetic Society of Japan)* 211, 71–82.
- Kubozono, Haruo. 2006. Where does loanword prosody come from?: A case study of Japanese loanword accent. *Lingua* 116, 1140–1170.
- Lovins, Julia. 1975. *Loanwords and the Phonological Structure of Japanese*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Marotta, Giovanna. 1985. *Modelli e Misure Ritmiche: La Durata Vocalica in Italiano*. Bologna: Zanichelli.
- McCarthy, John, and Alan Prince. 1994. The emergence of the unmarked: Optimality in prosodic morphology. *Papers from the Annual Meeting of the North East Linguistic Society* 24, 333–379.
- Prince, Alan, and Paul Smolensky. 1993/2004. *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*, Oxford: Blackwell Publishing.
- Repetti, Lori. 1993. The interpretation of foreign loans in the Phonology of Italian. *Italica*, 70(2), 182–196.
- Steriade, Donca. 2007. Perceptual repair and syllable structure: A reply to Kabak and Idsardi. Unpublished ms., MIT.
- Tsujimura, Natsuko. 2007. *An Introduction to Japanese Linguistics*, Oxford: Blackwell Publishing.
- Vance, Timothy J. 2008. *The Sounds of Japanese*, Cambridge: Cambridge University Press.